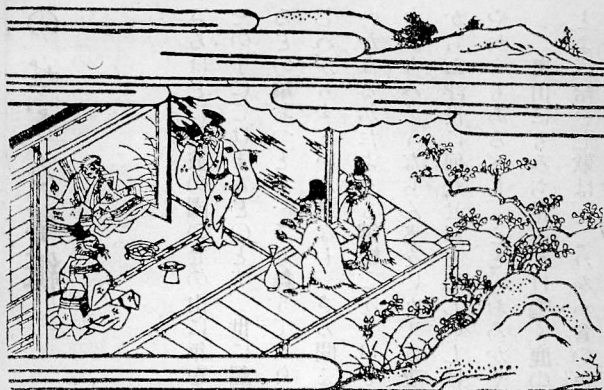


の
せ
ざ
ろ
草
紙

のせざる草紙

さるほどに丹波の國のせの山に年をへし猿あり、名をばましをのごんのかみと申しける。その子にこけまるどのとて、世に超えて智慧才覺ちゑさいかく、藝能すぐれけるかたあり。此こけまるどの扇おつとり一さし舞うて入り給ふを、いかなる者も見より心そらになし、おもしろがらずといふ事なし。さる間こけまるどのやうく二十ばかりに成らせ給ふ。父母いかなるかたよりも御嫁ごとと申させ給へども、耳にも聞き入れ給はず、われ思ふ子細あり、なみくならん者をいかでか妻に迎へん、いかなる公卿殿上人の娘ならでは、久しからぬ浮世に何かせんと思しめしける。世の中の人たち、身の程しらぬ望と思ひ給はんやからもあるべし、こともおろかや、われらが先祖猿丸太夫は皆しれる歌人かじんなり、奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき

とよみ給ひし歌は、これを小倉の色紙しきしの和歌に定家ていかも入れられしなり、其外世々の歌人



さもありげに
尋常に

の説にも、われを稻負鳥いなおほやどり、ましらの聲などとしてよ
みおく和歌を人しらすや、おそらくば系圖にお
きては誰人たれびにか劣るべき、なまじひなるやから
に身をそめ、何かせんと思しめし、春は岩のは
さまにて花を見、秋は木々の梢にては月をなが
め、萬の木のみを愛し、いとやさしき色好みてお
はしける。さる間立願の子細ありて、日吉の御
神にまゐらせ給ふが、をりしも都は柳櫻をこき
ませたる春にてありければ、こよかしこ東山の
あたりを眺めありかせたまふ。こよに北白河の
邊に、さもありけに造りたる草木くさきの御所あり。
是はいかなる人のすみかやらんと、立ちより霞
のたえまより眺め給へば、うつくしき姫君、琴
ひきてる給へり。いかなる方かたやらんと、心そら

になりつゝ、まだたきもなくまほらせ給ふ。かやうに心をうつし給ふも道理かな、兎のいきのかみ殿の、ひとり姫にてぞおはしける。そのかたち尋常に、耳のあたりぬれくと色白く、世には並びなき御姿にてぞありける。こけまるどのはつくくと見給ひて、世の中の人にはかやうの姿あらじ、いかにしてつてもがなと、それより踏む足もしどろにて、夢に道を辿るやうにして、日吉の御社にまゐりて、鰐口打鳴らし、歸命頂禮山王二十一社、白河邊にて見し君のおもかけ忘れやらで、今は露の命も消え失せなんと思ふ此身をたすけ、かの姫に逢はせてたび給へと、肝膽を碎き涙ながら口説き給ひて、御まへをたよせ給ふが、目もまひ心きえくとなれば、故里へ歸らん事もなりがたく、木の葉かきよせ枕として、苔路のむしろに倒れふし、ほれくとして明かさせ給ふ。しかる所に狐のゐなかどのまゐりあはせ給ひ、かのこけまる殿をつくくと見て、御目元、手足の尋常さよ、いかなる御方なればかくてこゝに渡らせたまふぞ、定めて此みやしろへまうで給ふが、旅やつれにくたびれさせ給ふかと、打ちとけて問ひしかば、苔丸殿、いやこれ行へもなき下臈の子にてさふらふと答へさせ給ふに、ゐなかどの、いや／＼それは空言と思ひまゐらす、いかさま此御神へまうでさせ給ふ人のなかに、たれぞの姫など

物や思ふ云々―
上句「忍ぶれど
色に出にけり吾
戀は」
色をも香をも云
云―信明集「君
ならで誰にか見
せん梅の花」

を御覽じて、しづ心なき戀に沈ませ給ふと見參らせ候ふ、心のうちを残さず語り給へと、
たのもしけにしみぐと申しければ、苔丸殿、涙をはらくと流し、物や思ふと人の問
ふまでと、いふことさふらふとて、御恥しけに顔を赤らめさせ給ひ、うちふし給へば、そ
の時ゐななどの、色をも香をも知る人ぞしる、みづからもわかく候らひし時は、さやうの
事も候ひしなり、おもひも戀も、若きときのならひなり、つゝまず申させ給へ、命ととも
に頼まれ申さんと言ひければ、たのもしの人の詞やな、かくて消えなば罪ふかし、今は
何をか隠し參らせん、過ぎにしころ白河の花木のまを辿りしに、思ひもよらぬ君を見て、
今は命の玉の緒の、絶えなん後にたれ人か、つゆもあはれと思ふまじき、もしも此事叶は
ずば、猿澤の池へも身をなけて、死なん命はをしからじと、たゞさめぐとばかりなり。
ゐななどの聞き給ひて、さてはいきの守どののひとり姫にてさふらふべし、心を碎き思し
めすもことわりや、此君と申すは、いきのかみ御ふたり四十ちにならせ給ふまで、子の
無きことを悲みて、八月十五夜の月に向ひて祈らせたまへば、北の方の右の袂へ月の宿
らせ給ふと、御示現あらたに蒙らせ給ひ、出でさせおはします姫にてましますば、う
つくしきことは理^{ことわり}なり、御名をばたまよの姫と申しさふらふ、いかなる方^{かた}さまよりも

けしやうのまひ
—まひはまへの
訛なるべし

岩木にあらぬ身
—白氏文集「人
非木石皆有情」

文たまづさの通ふ事、ふる雨よりしけくしくさふらへども、女御后、にようごきさきもしは公卿殿上人ならでは、御婿にとらじとて、祕藏し給ふ姫にてさふらふが、御ことはたどならぬ御方と見参らせ候ふまゝ、叶へてまゐらすべし、御心やすく思しめせ、幸わらはが娘を、その姫君へ御宮仕に参らせ、けしやうのまひと召されさふらふ、みづからもさいくかの姫の御方へ参り候ふ、御文あそばせ、届けてまゐらせんといへは、苔丸殿いとうれしくて、

君ゆゑにかき集めたる木の葉どもの散りなんのちをたれか問はまし

かやうにあそばし渡し給へば、ゐなかどの袂に入れ、やがて彼方へまゐらせんとて、白河の御所へまゐりければ、姫君つくぐと見させ給ひ、何とて此程は、うちたえ給ひしと、雪をあざむく御顔をもたけさせ給ひ、いとなつかしけに仰せさふらへば、ゐなかどの、御まへに人の無きをを得て、しかぐの御文とてそばに置く。姫は耳をそばめ、恥しけにうつぶき給へども、ゐなかどの、人たらしの上手にて、昔よりつれなき人は、浅ましくなりはて候ふ。いたづらになりし小野の小町が事まで言ひきかせければ、さすが心づよきも罪ふかし、岩木にあらぬ身なればとて、かくぞかし、

をちこちの云々
―此歌―をちこ
ちのたづきも知
らぬ山中に覺束
なくも呼子鳥か
な―の古歌を取
れり
こんく―狐の
鳴聲を來んにか
く

をちこちのたづきも知らぬ山猿のおほつかなくもわれを問ふかや

筆もしどろに書きながし、さしおき給ふを、取る手もうれしくて、やがてこんくと言ひ
ちらし、狐のるなかは歸りけり。いそぎ苦丸どのに持ちてゆき見せければ、うれしくて
ふと起きあがり、三度いたゞき見て、うつくしの御手やと、胸にあて顔にあて、それよ
りなほいやましに思ひつゝ、たびくの御文をやり給へば、ふたかはの行末はやがて逢
瀬となり給ふ。けにや小笹の一節も、なれての後はしのびくに通ひつゝ、今は淺から
ぬ中とならせ給ふ。父いきのかみ、北の方きと給ひ、けにも丹波ののせのましをのぐん
の守の苦丸殿は、聞き及びし色好み、いかなる公卿殿上人の中にも無き姿なり、今は御
見參とて、いろく深山の菓子とり集めてもてはやさせ給ふ。此事丹波のぐんのかみ聞
召し、此頃いづかたへも渡らせ給ふぞと思ひしに、さてはかやうの事にてありしを、知
らざる事よとて、御むかひに馬乗物、木葉猿共を、おびたしくつかはし給ふ。こけまる
どの、たまよの姫君を引具し丹波へ越え給ふ。父母吉日をえらび、御見參ありて見給ふ
に、世にはかよるうつくしき姫君もあるかや、こけ丸の心をつくしつるもことわりやと
て、とりはやさせ給ふ。その後御子あまたいできさせ給ひ、末繁昌に榮えさせ給ふ。昔も

今もかゝる御幸おんさいはひあらじと、めでたき事かすかぎりなし。